

「カイメンタケ (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

サルノコシカケという仲間のキノコがある。まるで樹木の幹についた小さな椅子のように見えるので「猿の腰掛」という名がついた。



カイメンタケはツガサルノコシカケ科の一種だ。コブキシサルノコシカケは広葉樹(サクラやウメ)の樹に発生するのに対し、カイメンタケを含むツガサルノコシカケ(梅猿の腰掛)科のキノコは、針葉樹の樹に発生する。写真のキノコは地面から発生しているようにも見えるが、実はカラマツの根から生えている。生きた樹木から発生することもあるし、すでに死んだ切り株から発生することもあるのが不思議だ。



サルノコシカケの仲間は、短命なキノコが多い中であって、多年性のものが多い。季節による成長のちがいで、樹木と同じように年輪が見られることがある。上の写真(コブキシサルノコシカケ)でも、同心円状の筋があるのがわかる。全体に木質で非常に堅く、靴で蹴ってもとれないこともある。傘の裏側に、胞子をつくる「管孔」がたくさん開いている。



カイメンタケは傘の表面に特徴がある。一つは同心円状の「成長線」だ。普通のサルノコシカケの仲間は、一つの筋が一年ということが多く「キノコ年輪」を形成している。しかしカイメンタケの場合は「一雨ごとに一本の筋」といった周期で成長する。表面には細毛が密集していて、「ピロード」のような手触りがある。

子実体の菌体はスポンジのように柔らかく、雨のあとなど水分を含んでいる時に握ると、内部の水が出てくるのを観察できる。この性質が「カイメンタケ」(海綿茸)の名称の由来である。



しかし、同じサルノコシカケの仲間でも、短命な種類もある。例えば、写真の「カイメンタケ」がその例と言える。